

琉球大学次期学長岩政輝男先生への インタビュー

日時：平成19年3月8日（木）12：45～
場所：琉球大学本部理事室



岩政輝男先生（左）と玉井理事（右）

○玉井理事 この度は、医学部出身として初めて琉球大学の学長に就任されるとの事で、沖縄県医師会としても大変名誉に思い、一同喜んでおります。この度の学長就任におきまして、先生の率直なご感想をお聞かせください。

○岩政先生 琉球大学に医学部が設置されてずいぶん長くなりますが、どこの学部から学長を出さないといけないということはないので、良い人がなればいいのですが、推されてたまたま学長になるだけの話です。（笑）

○玉井理事 岩政先生は医学部で医師を中心とした人材育成をやられていたわけですが、今後は琉球大学で医療従事者に限らず多くの人材育成に携われる事になると思いますが、先生の考える人材育成、または人づくりとはどのようなもののでしょうか。

○岩政先生 国立大学が法人化して、今までと違って自分たちで中期目標、中期計画を立ててやっていくわけですが、それを評価する機関の「大学評価機構」があり、そこで大学がしっかり頑張っているかどうか評価されます。大学の使命は教育と研究です。どういう人を作る

かは、若い人達がどんどんアイデアを出していかなければならないと思います。社会が変わり、学問が進歩し、みんなの考え方が変わって行く、そういう事を考えた上での人材育成をやらなるといけないのです。昔のままの人材育成をそのままやっていると現在の社会レベルに合わないはずで。今までの大学は、ややもすると遅れがちです。教育と研究を直ぐ分けたがりますが、みんなが一生懸命いい研究をしないと、いい教育が出来ません。

○玉井理事 国際的な人材育成に関しては何かお考えはありますか。

○岩政先生 人材育成というのが、本来の大学改革の目的ですが、みんなそれを忘れていただけです。もともと大学改革については日本は少し後追いをしております。EUの人たちにとっても非常に重要な問題で、国境がなくなったから、周りの国から優秀な人がいくらでも入ってくるようになり、自分の大学の卒業生が就職できないようになったのです。日本が島国だからそれが実感としてないだけであって、既に国際的という言葉の意味が変化してきています。アジアでは現実に中国の人がどんどん外へ出て行っています。琉球大学も中国の人は多いです。日本ももっといろいろな人が来やすいようにするということが他の国から求められておりますが、なかなかやれないだけの話です。琉大の卒業生は国際的に通用するということを考えるのではなく、もともとそうでなければいけないのです。

○玉井理事 結局いい人材を育成しても社会そのものが、それを認容する環境になれば、どんどん外国に逃げていってしまいますよね。

○岩政先生 それはしょうがないことです。逃げるということをして阻害してはいけません。人を育てるのも大学ですから、どんどんいいところへ行って欲しいと思います。日本に残らないとすると、それは我々の責任であり、地域の責任でもあります。地域がそういう事を考えてやっていく必要があるのです。

○玉井理事 これは本会が非常に苦慮してい



琉球大学次期学長
岩政輝男先生

【略歴】

昭和17年2月25日生 本籍 山口県
 昭和41年4月 熊本大学 医学部卒業
 昭和51年11月 熊本大学 医学部 助教授
 昭和55年12月 琉球大学 教授（文部省設置審）
 昭和59年4月 琉球大学 教授
 平成12年4月 “ 医学部長
 （平成16年3月任期満了）
 平成17年6月 “ 副学長、財務・施設・
 医療担当理事
 （平成19年5月任期満了予定）
 平成19年6月 琉球大学学長就任予定
 現在に至る

るところで、人材がそこで根付いてくれず、いい人材が逃げてしまうとなると困ってしまうわけです。

○岩政先生 優秀な人材が来て、またリクルートしているというふうにと考えると、優秀な人がどこかへ行っても、その代わりにもっと優秀な人が来る。そのサイクルが上手くいけばいいわけです。外国でも誰かがじっと同じ場所にいる時代ではないと思います。アメリカの優秀な研究者が、次の学会発表の際にはイギリスの大学の先生になっていたり、フランスの先生が次にイタリアの先生になっていたり、どんどん自分の仕事がやり易いところに移っているわけです。仕事のやり易い場があれば、いろいろな人が来るでしょうし、その人がある程度満足出来ることをやったら、次のステップのところに移るといえるのが、今の若者の考え方じゃないでし

ようか。それに棹をさしても逆に地域も人も育たないと思います。

○玉井理事 今、医師不足、看護師不足、助産師不足について、沖縄県医師会は人材の確保にどういった智恵があるのか模索しているところで、その中で魅力ある研修医システムとか、魅力ある職場づくりとか、本来はそういうところをしっかりとやるべきで、社会そのものが人材を育て、またそこに学べる環境があるということでしょうね。

○岩政先生 地域が人材を育てるといのは大事ですが、地域が自分のところに人を溜め込もうとするとい環境にはなりません。今の若者の考え、それから世界的な考え方というのは、自分のところに人を溜め込むという考えではないのです。看護師が足りなければ、外から来てくれる。その人はもっといい場所があれば、そこへ移る。それを最初から認識して次に移っていける場を作らなければ人は来ません。あそこへ行ったらいつまでも抜け出せないとなると、人は来るはずはないのです。

○玉井理事 閉塞感という言葉がありますが、今まさに産婦人科や小児科において職場の中で閉塞感があります。入ってしまったら抜け出せないということが逆に将来に対する漠然とした不安に繋がっているところもあります。

○岩政先生 今ここに来たら、これだけ魅力があつて面白い事があるから来る、そこで仕事をしたら次に移ると考えるはずで。それをサポートしてやればいいのです。溜め込もうとするから、逆に人は来ないのです。

○玉井理事 次の可能性に対して懐の大きさを出した方がいいのかもしれませんがね。人材というのは、それを育成するシステムも大事ですが、その人が自分という人材をどう活かして行けるか、活かしかれるかというモチベーションを持つこと、その本人の考え方も大事だと思います。

○岩政先生 今までの大学の先生方は押し寿司を作ろうとして、押し寿司で育った人たちが大学や地域に残ってくれると考えていますが、

人はそれぞれ違うはずで。

○玉井理事 むしろそういうモチベーションを持てるような、一人で巣立って行けるような強い心を持った人を育てるのが大事なのではないか。

○岩政先生 行政もそうですが、将来の見通しを考えてやらなければなりません。学問の世界では人の真似をしている人は次に何が起こってくるかが分かりません。先端の事をやっている人は、これをやると次はこうなるという、10年、20年先の学問の進歩が分かるのです。世の中の動きが激しいので、行政はおそらく4、5年先の計画を立てるのは難しいでしょう。4、5年の計画であっても次を見込まないとだめです。看護師不足については、多くの看護学校がありましたが、准看だったので閉鎖してしまいました。先を見込まないとだめです。学問のレベルを見ていたら、もっと医療のレベルは上がるので、看護師はもっと必要になるはずで。

○玉井理事 南に開かれたとよく言われますが、留学生の方々の大学教育についてはどのようにお考えですか。

○岩政先生 南に開かれたと言いながら、今、殆ど中国の人が来ています。中国の人は、沖縄を一つのステップとして、次はアメリカへ行こうとか、次はどういうことをやろうとか、さらに次のステップへ発展することを考える人が多いです。それ以外、中国以外が我々の考えている南なのかもしれませんが、南に開かれたと言っても、人によっていろいろな考え方があります。我々が考えているのは、南という問題と北という問題があつて、北は先進国で、今まで先進国の理論でいろいろな資源を開発し、文明が発達して便利になっていますが、資源を殆ど使い尽くしつつあります。北の理論で南の資源を使って南が低開発国だということ自体がもしかするとおかしいかもしれません。同じ歴史の中で、時間を経てきたのであれば、南の理屈で見ると北の方がおかしいのかもしれませんが。例えば、イタリアの南の方はのんびりして、暖かく、沖縄流で言えば「テーゲー」と言われる

が、観光客はたくさん来る。南が低開発かというのと、それは北の理屈で言えるわけで、むしろ南の理屈で見ると、北の方がおかしいかもしれません。南に開かれたというのは、南の理屈で、南のいろいろな医療とか人の生活とかをもう少し勉強しようという意味であって、我々が北の理屈で施しをしようという意味ではないのです。

○玉井理事 私も分かる気がします。幸福だとか、豊かだとかというものを北の理屈、尺度で考えてしまうと、施しという形になるでしょうが、全然違う尺度があり、それを考えれば我々も教えてもらい、理解しないといけないことが多いわけですよ。

○岩政先生 我々がやっている国際交流というのは、今言った理屈でやっているわけです。今、砂川元先生（ラオス国口唇口蓋裂患者支援センター・琉球大学医学部歯科口腔外科教授）たちがやっているラオスでの活動に対して、「沖縄も困っているのに、何のためにやるのだ」と言われるが、今言ったような考えでやっているのです。

○玉井理事 また向こうで学べることもあり、我々が得てくることもあるということですよ。全く私も同じ意見です。物質的豊かさだけで、いろいろな事を議論したりすることが多いですが、そういう事だけでは解決できませんよね。

○岩政先生 国際交流をやる事の意義がそこにあって、そうするとおそらく武力紛争なども少なくなるかもしれません。

○玉井理事 先生は学長になることに対して、自分自身でなろうという気持ちはあったのでしょうか。

○岩政先生 昔、医学部長になった時もそういう気持ちはありませんでした。本音を言うとやる気はあまりなかったです。

○玉井理事 なりたくてやっているのと、仕方なくやっているのと、こういうのは先生自身の中ではどうですか。

○岩政先生 もしかすると、なりたくてやる人の方がいい面もあるだろうし、逆に客観性が

ない場合もあるかと思います。

○玉井理事 普通の人は、どうしても強い上昇志向というものを想像してしまいます。私は大学時代から先生に飲み連れて行ってもらったり、先生のご自宅で古酒をご馳走になったりととてもお世話になりました。当時から先生はどちらかというと、あまり欲というか、そういうものはありませんでしたね。

○岩政先生 そっちの欲は殆どありませんね。昔の開業医はよく自転車で往診していたんです。私も当然そういう風になるだろうと思っていたのですが、私のいた内科から、「病理の方に行って勉強してこい」と言われて、しょうがなく行ったら、そのままになってしまいました。初期の目的とは違いますね。

○玉井理事 これがとても不思議ですね。

○岩政先生 もともと退官の年ですから、のんびりしようと思って、実はあるところに臨床医として勤めることが決まっていたのですが、こういう事になって、これは困ったなという感じですよ。

○玉井理事 先生らしいですね。

○岩政先生 学長の仕事というより、砂川元先生達と沖縄ラオス友好協会というのを作って、ラオスとの交流等に力をいれています。今回、ラオスに小学校を作ることになりました。交通機関が発達しておらず、生徒は往復歩いて通っていますが、片道5kmもあると10km、また、給食施設がなく、昼食を食べに家に帰るので、20km程度歩くことになります。小学校3年生頃になると、労働力になりますので小学校に来なくなります。日本のボランティア団体が来て支援しておりますが、アフターケアがないのです。幸いなことにラオスにたった一つある大学（ラオス国立大学）と琉球大学が姉妹校なので、附属小学校を作ろうと、今募金を集めているところです。有り難いことに全く知らない人たちからの募金もあります。今月の25日から28日まで砂川先生と一緒にラオスに行って、国立ラオス大学内のどこに小学校を建てるかを相談してきます。

○玉井理事 先日、沖縄平和賞受賞に際し

て、砂川先生へインタビューさせていただきました。砂川先生ご自身がラオスで貴重な体験をしてきたという言葉が非常に印象的でした。

○岩政先生 ラオスに建設する小学校の設計図があるのでお見せしましょう。今までのラオスの小学校はトイレ、図書室などありませんでしたが、今回トイレ、図書室、職員室、コンピューター室等を設ける予定です。給食室は、給食を作る人がおりませんので今回は予定に入っておりません。

○玉井理事 琉大の学生や卒業生がラオスに行くということはあるですか。

○岩政先生 琉大から講師の派遣や生徒の交流を考えています。

○玉井理事 それこそ人材の交流ですね。

○岩政先生 玉井先生も手伝いませんか。(笑)

○玉井理事 いいですね。(笑)

○岩政先生 小学校の名前を、ラオス沖縄小学校にしようかと考えています。

ラオスとの交流を深めるために沖縄ラオス友好協会を作りましたが、森田現琉大学長、當眞

沖縄電力代表取締役社長等が役員になっており、ラオスに小学校をつくる活動は同協会の役員が主に携わっております。

今のラオスの小学校は非常に酷い状態で、トイレがないから近所の草むらで用をすませています。戦後の日本に似ています。お金がなくピアノやリコーダーもないので、楽器がなくても出来る民族音楽を教えているのだそうです。お金がないなりに工夫しているのですよ。ピアノを寄付できたらと思っています。やはり、工夫が大事でしょうね。

○玉井理事 教育現場は自殺の問題に限らず、いじめの問題が社会現象化していますが、このような問題に対して、ラオスの小学校から何かヒントがもらえるかもしれませんね。我々が学ぶべきもの、忘れていたものがあるかもしれません。

本日はお忙しい中、貴重なお時間を割いて頂き、ありがとうございました。

インタビュアー：広報委員 玉井 修

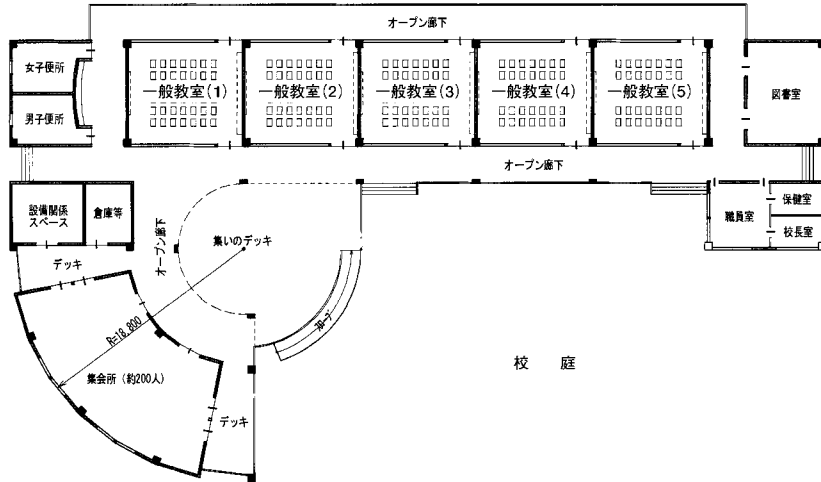


ラオスの小学校建設について熱心に話す岩政先生と玉井理事



ラオスに建設する小学校基本計画

2007.02



延べ床面積 小学校 603.84㎡
 集会所 155.66㎡ 合計 759.50㎡

平面計画 PLAN 1

SCALE 1/400



立面計画 PLAN 1

SCALE 1/400

印象記

広報委員 玉井 修

久しぶりに琉球大学に来てみると、春休みの為に閑散とはしているものの昔の記憶が甦って来ました。岩政輝男先生とは琉球大学医学部の学生時代、よく飲みに来て行って頂きました。泡盛の古酒がお好きで、ご自宅でカメに仕込んである秘蔵のお酒をご馳走になりました。酔いが回るにつれて、更に格別な秘蔵酒をふるまって頂きました。多くの学生が先生を慕って、所属クラブや学年の垣根無く楽しく飲んでいたことを思い出します。穏やかで、欲の無いお人柄が人望を集めるのだと思います。今回の学長就任に関しても、ご感想をお聞きしたら「推されてたまたまなただけです」と余りに素っ気のないお返事でした。しかし、穏やかさに隠された熱い情熱は以前にも増しておりました。静かな物腰の中、ラオスでの小学校建設に関してお話して頂いたときの目の輝きには涙みがありました。「どうだ、一緒にやらないか！」と言われた時には、思わずハイと言いそうになりました。インタビューを終えて帰ろうとすると、岩政輝男先生は、「学食でカレーでも食べて帰りなさい」と言って、琉球大学の地図を探してご丁寧に学食の場所を説明していただきました。気さくさも全くお変わりなく、魅力溢れる岩政先生のご活躍を確信したインタビューでした。